



## 1 ホルン奏者の「気持ち」 丸山 勉さん（ホルン）



### コンサート前の「きめごと」

ある外国のテレビ番組によると、ホルン奏者はあらゆる職業の中で“2番目”に精神的プレッシャーのかかる仕事だそうです。そのように言われるぐらい失敗しやすい、難しい楽器ですから、本番で100パーセントの力で臨めるよう、体調管理はもちろん、“ゲンかつぎ”もしています。

コンサート前には7回（ラッキー・セブン）に分けて水を飲み、ステージに上がる時は他の男性に遅れをとらないという意気込みを込めて、女性の後に入るよ

うにしています。

演奏直前の立礼の時は、視線でゼット（Z）を描きながら客席を眺めます。こうするとリラックスできて、集中力が高まります。

### ソロの時は視線を高く、遠くを見る

特に緊張が高まるのは、やはりソロ（単独で旋律を演奏する部分）です。ソロの時は視線を指揮者よりも高くして、遠くを見ます。柔道でも下を向いていると負けてしまうといいますが、そしてこれはあまり知られていませんが、自分の後ろの奏者がうまく演奏した時に、こっそり右手で「良かったよ」のサインを送ったりします。

ステージ上でのマナーにも気を付けています。オーケストラは社会の縮図ですから、ルールやマナーも一般の社会と同じだと思います。音楽家の心得について書かれた名著『ホルニストという仕事』という本があります。すばらしい内容な

ので、ぜひ皆さんにも読んでいただきたいと思います。

### いいお客様は財産

KSTのコンサートには毎回本当に味のわかるお客様に集まっていたいて、とても幸せです。いいお客様は他に代えがたい財産です。常にいいお客様で一杯になったホールで演奏することは、オーケストラが成長するためのバロメーターにもなります。今後は、より積極的に音楽性豊かな演奏でお客様に喜んでいただきたいと思います。



ホルニストという仕事  
著者：ポールブリッチャード  
翻訳：山田淳  
出版社：春秋社

## 2 「神様、仏様、リード様！」～オーボエと「リード」

蛸崎 耕三さん（オーボエ）



### 静寂でのプレッシャー

オーボエはとても小さなリード（歌口）に息を入れるので、音を出すときに失敗しやすい楽器です。ですからチューニングはやはり嫌ですね（笑）。特に日本ではチューニングをする前から客席もステージもとても静かなので、少しのミスも許されないというプレッシャーの中で音を出しています。ヨーロッパではチューニングの直前まで客席も適度にざわついていますが、オーボエ奏者のためにも、日本のお客様ももう少しつらいでもいいのでは、と思います（笑）。

### オーボエ奏者はリード職人

オーボエの心臓部分ともいえる繊細なリード。自分に合ったリードを手に入れるた

めに、プロのオーボエ奏者のほとんどは自らリードを製作しています。

リードの製作は、南欧の温暖な地域の川べりに自生している「ケーン」と言う植物の茎を2～3キロ単位で仕入れるところから始まります。これを適切な大きさに切って乾燥のために2年ほど寝かせた後、ようやく本格的な製作過程に入ります。専用の機材を使って、100分の1ミリ単位の精度で自分の好みの厚さに削っていきます。とても地道で根気のいる作業を経て完成されるリードですが、でき上がってみて実際は使い物にならないこともよくあります。

オーボエ奏者の生活は、リードを基本に成り立っていると書いても言い過ぎではあ

りません。私の場合でも1日最低4～5時間はリード製作に使っています。また、良いリードのストックが十分にある時には気分が晴れ晴れしますし、逆に楽しいことがあっても良いリードが少ないと何となく不安です（笑）。ステージで笑うために、私たちは自宅で日々泣いているのです。

### ミクロの戦い

オーボエのトーンホール（指で押さえる穴）は小さいものではほんの数ミリで、ここに水滴が入っただけで全く違う音が出てしまうため、コンサートの最中に布や鳥の羽を使って、あるいは息を吹き込んで必死に水滴を取っています。

また、リードの隙間にほんの小さなごみが入っただけでも全く音が鳴らなくなってしまいます。ですから、開演前はとにかく歯磨き！ いつも20分くらいかけて、電動歯ブラシで念入りに磨いています。

今後は、世界中のお客様に私たちの緻密なアンサンブルを聴いていただきたいと思っています。



削り器



リードの最終調整



1995年紀尾井ホールオープンと同時に誕生した室内オーケストラ紀尾井シンフォニエツタ東京。活動12年目を迎え、ますます活動を進化させるとともに、活躍の場を広げています。今回の「紀尾井音楽百話」では客席からはうかがいしれない演奏家の胸の内を、それぞれが演奏する楽器に対する思いを通して語ってもらいました。こんど紀尾井ホールでの演奏を聴かれたときには、また新たな発見があるかもしれません。紀尾井ホールで会いましょう！



### 3 天使の持つ楽器 杉木 峯夫さん(トランペット)



#### トランペット奏者は前向きな人が多い？

トランペットは音が大きいので、弦楽器の響きを壊さないようにしながら、盛り上げるところや句読点を打つところ、アクセントをつけるところで「全部いただきます！」と出てきます(笑)。ティンパニーなどと一緒に全体の音程やリズム

を引き締める「信号」の役割も果たしています。

トランペット奏者はくよくよせず、前向きな人が多いかもしれません。例えば失敗してもそれを恐れず向かっていく気持ちがないと、とても演奏できません。大きな音なので間違えると子どもにもすぐにわかってしまいますから(笑)

#### オーケストラの構造はピラミッド

オーケストラでも会社と同じように、それぞれ役割があります。組織の頂点に指揮者やコンサートマスターがいて、ここからの情報が隔々まで降りてきます。弦楽器であれば頂点にヴァイオリンがいて、底辺をコントラバスが支えます。管楽器ではフルートやオーボエが頂点にいて、それをトロンボーンやテューバが支えます。

このように基本はピラミッド状の構造ですが、それが曲によっていろいろと変化します。

#### 良い楽器と「丸い音」

良い楽器とはコントロールしやすく、思う通りの良い音が出る楽器です。良い音は他の楽器になじむ「丸い音」です。

また、演奏する人の個性が楽器を通して出ますので、演奏者が楽器を好きになるだけでなく、楽器に好かれなくてはなりません。

#### 毎日の練習が大事

1日に4～5時間は練習します。4～5時間あると、基本の練習のあと違う内容のものを吹いてから、また元に戻ることができます。自転車に乗る練習と同じように、新しいことをした後にちゃんと帰ってくるのが大事です。また、どんなことでも習熟するとそうですが、だんだん道具のことを意識しなくなり、職人さんのように無駄な力が抜けてきます。

私はいつも、いろいろなところに隠れている音楽や練習のヒントを探しています。

### 4 明るくて軽やかな音色～フルート～ 一戸 敦さん(フルート)



#### モーツァルトも嫌った楽器(?)

モーツァルト(1756～1791年)の時代のフルートは「トラヴェルソ」と呼ばれていて、単純に穴を指でふさぐだけの構造でした。とても音程が悪く、モーツァルトも嫌っていたそうです(笑)。でも、『フルートとハープのための協奏曲』のような素晴らしい曲を書いてくれました。その後19世紀にベームというフルート奏者・製作者がシステムを進化させて、飛躍的に演奏がしやすくなりました。独奏楽器として認められるようになったのは、20世紀にランバルという素晴らしいフル

ート奏者が出てきてからのことです。

#### オーケストラの魅力

オーケストラには、ブラームスやベートーヴェンをはじめ、大作曲家の残した素晴らしい曲が数多くあります。それらに触れることができるというのが、オーケストラで演奏する醍醐味です。

オーケストラに入って一番苦労したのは、譜読みです。役者さんが台詞を覚えるように、楽譜を読んでいく作業です。毎週何曲もこなさなくてはならないので大変でした。ピアノのように音の数が多い楽器の人からは、笑われてしまいますが(笑)。

フルートは音色が明るくて軽やかなので、性格的にも明るく、深く悩まない人が多いと思います。特にオーケストラで演奏している人は、大勢の中で目立ちたいという性格の人が多くいのではないのでしょうか。

#### 音色(おんしょく)へのこだわり

一番こだわっているのは音色です。いい音色というのは明るくて響きが豊かで、ど

こまでも限界を知らずに伸びていく音です。フルートはオーボエやクラリネットのようなリードがないので、歌のように、体が響いている音を出しています。素晴らしいソプラノ歌手のように、聴いただけで惹かれるような音を出したいですね。

#### 効率よく燃費よく

弦楽器で言う「弓使い」がフルートの「息使い」です。フルートは息を遮るものがないので、息がどんどん出ていってしまいます。声楽を学んだり、泳ぎに行ったりして呼吸を鍛えています。肺活量よりもいかに効率良く、燃費良く走るかが大事です。頭で考えていてもうまくいかないもので、楽器が調子良く鳴っている日はほとんどの問題はクリアできます。野球でいうならば、球が走っているかどうか大事ということでしょう。

これからも人の気持ちを和らげることができるような、いい演奏をしていきたいと思っています。